ぱちんこ
言葉物語 ⑨

「クルーン」

今回の言葉物語の題材は「クルーン」です。

くるくる回るから？

「クルーン」と言えば、あのゆらゆら回る玉の動きに一喜一憂された方が非常に多いと思います。この言葉、聞くと何か英語のような響きに聞こえますが、翻訳ソフトで検索してみても出てくるものは速い球を投げる投手の名前だの外国の通貨単位だの、果てはタイ語で「波」という意味だのとパチンコには無関係のものばかり。そこでいろいろとメーカーさんにも聞いてみたところ、どうやら「役物の中をくるくる回るから〝クルーン〟」という造語説が大勢を占めているようです。また開発の方が「仕事がクルーン（来る）」と願って名づけた役物だという話もあり、語源の正確な情報ははっきりと断定されていないようです。個人的には、聞いている限りではクルクル回る玉のことだよと言われた方がスッキリしますが。

クルーンとはパチンコにおいて玉の振り分け装置として機能しており、初期では主に入賞（通過）した玉を受けての演出的役割が主流でした。その後、それ自体で大当たりを左右する役割を持ち大人気となったのは、やはり「スーパーコンビ」の三つ穴クルーンでしょう。

スーパーコンビ　真ん中にあるのがクルーン

ドキドキ感が一気に

それまでは入賞＝大当たりに直結していたものが、クルーンに入り大当たり、またはハズレまでの十数秒の時間が猛烈にドキドキできる時間となりました。また、それまでの機種の特徴であった「入賞＝大当たり」から、入賞したらその3分の1が大当たりという形への変化により、それまでよりもクルーンへの通過玉を増やせることになりました。パチンコのエンターテイメント性が飛躍的に向上し、単調なゲーム性に新しい楽しみ方ができるようになりました。また店舗側においても、一日当りでクルーンへ通過する玉の個数について個体差による営業上の影響を受けにくい遊技フローである事も手伝い、そのゲーム性の良さから、設置台数は全国規模で増えていく事になりました。

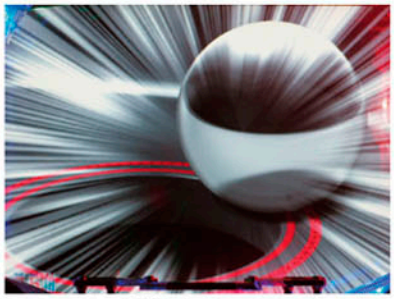
不正行為が多くなり

しかし、どうしても大当たりの過程が明確に見える特性上からこのクルーン搭載タイプでは台たたきなどの不正行為も多くあり、パチンコが野蛮なイメージを抱く原因のひとつにもなりました。またホール側においても営業時間中すべてを監視することは難しく、ゲーム性は秀逸ながらもその安全管理問題や遊技機の規定の変更もあり、現在では大当たり判定を役物でする場合はクルーンタイプから回転体タイプに姿を変えて行くことになりました。

もう一度楽しみたい

クルーンは羽根物と同じく、大当たりまでのルートが極めて明確に表現されています。言い換えれば機械による抽選に邪魔されない完全な勝負とも言えます。全てがフローで管理され、レールの上を走るだけの勝負は飽きも早いものです。つまり己の選択に委ねられるものや自分で大当たりを引き当てた感動は、演出でどんなに豪華に見せられるよりも達成感を感じます。現在では不正行為などの発生により、羽根物などでも核心の部分では機械が介入することで、このような行為が横行しないような対策をされていますが、クルーンについては対策の方法も乏しいために大同のミサイル7―7―6D登場以降「クルーン」は過去の言葉になりつつあります。エンターテインメント全盛の現代のパチンコですが、それだけにかえって、本質を突いた筋肉の塊のようなソリッドな台を無性に楽しみたくなるのです。パチンコファンはこれを「わがまま」とは言わないでしょう。

（大和田敏男）


クルーンを搭載したパチンコを漫画「カイジ」。今も名シーンの1つとして語られる
©福本伸行／講談社
※画面はCRカイジの1シーン

過程が見えて惹きつける